

周程授受再考

土田 健次郎

- 一、本稿の企圖
- 二、二程の態度
- 三、程門の姿勢
- 四、連續と斷絶

一、本稿の企圖

「周程授受」とは、言うまでもなく周敦頤（濂溪）と程顥（明道）・程頤（伊川）兄弟の間になされた道の傳授である。宋代の道學は周敦頤によって創始され、それを繼承した二程兄弟が基盤を確立したとされてきた。しかし一部では周敦頤と二程の間の學の傳授を否定する見方も根強く存在した。その根據もかなりの説得力を持っていた。それでも依然として周程授受が承認されてきたのは、もし周程授受が成立しない

とすれば、周敦頤の位置づけに困難をきたすからである。つまり宋代における周敦頤の位置が見定められない以上、周程授受という神話は生き續けるのである。

筆者は「宋代思想史上における周敦頤の位置」（『東方學會創立五十周年記念東方學論集』、一九九六）という別稿で、周敦頤は道學者ではなく、通常宋初古文家とくくられる一連の人々たちの中に置くべき存在であるという議論を展開した。またあわせて宋初古文家の思想的傾向、中央への態度、彼らが出現する思想的土壌についても論究した。そこで前提としたのは當然周程授受の否定である。筆者は以前發表した北宋道學關係の一連の論考でも同じ立場を取っていたが、論據については斷片的に觸れるに止まっていたため、重複を恐れずこの問題を獨立して網羅的に論じる必要を感じていた。

なお本稿を「再考」と題したのは、筆者が以前この問題について論考を發表しその訂正を必要としたからではない。從來の通念を洗いなおすという意味での再考なのであって、この消息は先に發表した「道統論再考」(鎌田茂雄博士還曆記念論集・中國の佛教と文化)、大藏出版、一九八八)と同じである。

筆者は以前から北宋道學の實質的創立者は程頤だと見なしてきた。道學とはもともと一つのまとまった學派があったわけではなく、當初は北宋五子のうち周敦頤以外の四者がそれぞれ弟子を持ち、血縁(二程と張載)や地縁(二程と邵雍)をきっかけとして相互に交渉を持っているという状況であった。そして彼らが順次没するにつれ、その弟子の一部が最も長命だった程頤のもとに吸収され、ここにまとまった一つの學派が形成されていった。これが道學である。⁽¹⁾北宋末期から南宋初期にかけて道學は多く程氏の學派と見なされて⁽²⁾いる。宋代道學の祖として周敦頤を表彰したのは朱熹である。朱熹は道學の中で自己の正統性を主張し、それとあいまつ道學觀と思想的文脈を貫くため、周程授受を強調し續けた。しかしそれは朱熹の問題なのである。朱熹と周敦頤の思想の原像を解明するためにも、周程授受は再考されねばならないの

周程授受再考(土田)

である。

二、二程の態度

程頤「明道先生行狀」(『程氏文集』一一)などにあるように、二程が少年時代、周敦頤に學んだのは事實である。それでも授受が成り立たないと見られる根據についての検討が、以下の内容である。なおこの授受に對する疑問は既に朱熹の時代からあった。それは朱熹が周敦頤を顯彰したことに對する違和感によるものであった。その代表は汪應辰「與朱元晦」9、10(『文定集』一五)である。その他、陸九淵は『太極圖說』を「老氏の學」として否定し(『與朱元晦』1、2、『象山先生全集』二)、朱熹に同調する張栻も二程が『太極圖說』に言及しないことは疑っている(朱熹『太極圖說』注後記)。また後代もこの問題はしばしば取り上げられたが、その代表として朱彝尊「太極圖說授受考」(『曝書亭集』五八)と太田錦城『疑問錄』上「周程授受」がある。⁽³⁾後者はあるいは前者を見たのか、かなりの部分が重なる。本稿は多くの先學の指摘を確認し、筆者自身の見解をも提示しながら、論を運ぶことになる。

二程が周敦頤に師事したのは、程顥一五、六歳の時、つま

り慶曆六、七年（一〇四六、七）でその時周敦頤は三〇歳から三一歳にかけてであった。道が傳授されるには二程が若年すぎると言わねばならない。それではその後二程が師事したことがあるかと言え、『程氏遺書』三に「某^{それがし}再び茂叔に見えし自り後、……」（第10條）とあることから、一部で二程は周敦頤に再會したことがあると見なされてきた。この後年の再會の時に道の授受はなされたのであろうか。問題はその時期である。許毓峯「周濂溪年譜」（『金陵齊魯華西三大學中國文化研究彙刊』三、一九四三）では、二程と周敦頤が次に會ったのは、慶曆八年（一〇四八）、郴縣でのこととする。その論據は、『遺書』七に程顥が一六、七歳の時に田獵を好んでいたが周敦頤に會つて後にその趣味が無くなったとあること（第3條の「一本の注」、姚名達の「程伊川年譜」（商務印書館、一九三七）を案ずるに程顥は一八歳以後周敦頤とは會つていないらしいといったことによる。また程顥の語に、李初平が周敦頤に讀書について質問したのを見たが、その時に周敦頤は李初平が老齡であるから讀書よりも直接の教示の方がよいとし、二年後になってその語の意味が悟れた（『覺悟』とある（『遺書』二二上 6）。原文の「覺悟」の意味は李初平が周敦頤の言葉の意味を悟つたととも解釋できるが、許

氏は李初平の死によつて程顥が周敦頤の意圖を悟つたと解しているようである。許氏に従えば、李初平は皇祐元年（一〇四九）に没しているのであるから、程顥が兩者の間答を目標できたのはその二年前以後、つまり程顥十七歳の慶曆八年（一〇四八）か翌年の皇祐元年ということになる。

許氏の考證だと二程の二度目の從學は最初の時にほぼ接しているということになる。その時ですら二程はまだ十代であり、周敦頤も三十代前半であった。この時期に學の授受がなされたというのはいずれにしろ不自然ではなからうか。朱彝尊は二程が十代半ばで周敦頤に師事した後に周敦頤が『太極圖說』を作つたのだから、二程に授けてはいないはずだと言うが、『太極圖說』の著作年代については陸九韶、それを是認する弟の陸九淵のように『通書』に比べて『太極圖說』の方が早年未定の説である可能性をおわす場合もある（『與朱元晦』1、『象山先生全集』一）。なお周敦頤が五七歳で没した時、程顥は四二歳、程頤は四一歳であった。かなりの長期間周程は會わなかつたことになるのであって、その間音信があつたのかも不明である。

二程は周敦頤の主著『太極圖說』、『通書』のいずれにも言及していない。『太極圖說』を表彰し續けた朱熹ですら、二

程が『太極圖說』を人に示した形跡が無いことを認め、「是れ則ち必ず微意有らん」としている（『太極圖說解』）。この微意については、張栻あての書簡で「太極圖……周子蓋し已むを得ずして作るなり。其の手授の意を觀るに、蓋し以爲らく惟だ程子のみ能く之を受くと。程子の祕して示さざるは、疑ふらくは亦た未だ能く之を受くる者有らざるのみ。」（『答張敬夫』10、『朱子文集』三二）と言い、二程に『太極圖說』に對する言及がないことを認めたらうえて苦しい立論を試みている。

そこで更に問題になるのが、『太極圖說』のキーワードである「無極」と「太極」である。朱熹は「無極而太極」の語があるゆえに周敦頤を表彰したのである。しかし二程の文獻のなかには全く「無極」も「太極」も出てこない。程頤の『易傳』には「太極」の語が出る。「繫辭傳」の部分は無く、「繫辭傳」以下に注した「易說」（『程氏經說』一所收）でも「太極」には全く觸れていない。「易說」の作品としての完成度の低さという問題はあるが、注までしておきながら「繫辭傳」を特徴づける概念の一つである太極への言及が見えないことは、程頤にとって太極という概念が相當軽いものであったことを示している。陸九淵は朱熹の『太極圖說』の稱揚

周程授受再考（土田）

に對する批判の一證として、「二程の言論・文字至りて多けれども、亦た未だ嘗て一も無極の字に及ばず。假令たとひ其の初め實に是の圖あれども、其の後來未だ嘗て一も無極の字に及ばざるを觀るに、其の道の進みて自ら以て是と爲さざるを見可きなり」（『與朱元晦』1）と、この問題を擧げるが、朱熹はこれに對しては特に答辨していない。また「二程の太極を言はざる者は、劉絢の程言を記するを用ゆるに、清虛一大人の別處に走らんことを恐る」と（『朱子語類』九三・53）と、二程が「太極」に言及しなかったことを認めている。（劉絢の記録は『程氏遺書』一―だが、この語は實際には同二上138の呂大臨が記録したもの）なおこの語の意味は、二程は張載の「太虚」の議論に否定的であったので、「太虚」と類似した「太極」を避けたということである。周敦頤の太極というキーワードや『太極圖說』という主著に二程が全く言及していないという事實は、朱熹でさえも是認していたのである。

なお程頤の作と傳えられるものに「易序」という一文があり、そこには「太極は道なり、兩儀は陰陽なり。陰陽は一道なり。太極は無極なり」と「無極」や「太極」が見えるが、この「易序」は程頤のものとは考えられない⁽³⁾。また、「易序」

と全く同文が二程の弟子の周行己の文集『浮沚集』四に「易講義序」の名で收められている。因みに周行己は人における太極を中や、更に性とし、また「萬物皆な太極有り、太極は道の大本」(『經解』、同二)などと重視している。

ただ程頤が『太極圖說』や『通書』を所有していた可能性もある。それは祁寬の「通書後跋」で窺われる。そこでは『通書』が二程の門人の侯仲良(師聖)↓高元舉・朱震↓祁寬と傳わったと言ひ、その後程氏↓尹焞↓祁寬というテキストも得たとある。また祁寬は九江に住んでいた時に、舊本を周敦頤の家で得たところ、以前手にいれたテキストと比べ、『太極圖』が無かったと言う。そして圖の方は周敦頤が二程に手ずから授けたので程本が圖を卷末に付しているのではないか、というある人の推測が擧げられている。尹焞は程頤晩年の弟子である。祁寬はその尹焞の語録の記録者である。この跋文が書かれたのは紹興一四年(一一四四)で尹焞は二年前に没しているが、祁寬が尹焞から得たのは事實であろうから、遡つて尹焞が程頤からこの兩書を手に入れた可能性は否定できないのである。なお時紫之が尹焞に會ひ、『太極圖說』を注したという記事もある(『朱子語類』九四 112)。時紫之という人物については今一つ不明であるが、『程氏外書』

一一が「時氏本拾遺」で、時氏はその原注によると『程氏微言』二五卷という多量の二程の語録を残した人物らしい。『宋元學案補遺』三〇では、二程の弟子とし、『皇朝文鑑』八四所收の張繹「絳州思堂記」に出る時候のこととする。因みに張繹は程頤の晩年の門人である。どうも二程の周敦頤關係の所傳は尹焞に集結しているようである。もつとももう一方の所傳に關わっている侯仲良は二程の母方の叔父の侯可の孫でもある。この侯氏は周敦頤に會ったという話がある。彼は程頤に従學していたが悟れなかつたので周敦頤のもとを訪れ話を聞いて得るところがあり、そこでまた程頤のもとに行つたところ程頤は彼の言葉の非凡を怪しみ「濂溪に従ふに非ずや」と言つたという。しかし胡安國の行狀に記されている彼の記事にも周敦頤との會見は見えず、年代的にもあわないうえに、彼がこの會見で悟つた「天の廣大なるが如し」という内容は彼の普段の言葉と似ていない(以上、『伊洛淵源錄』一二)。推測であるが侯氏が周敦頤の文獻を傳えたので、彼との關係を言う話ができたとする程度のことであろうか。ともかくここで強調したいのは、たとえ二程が『太極圖說』や『通書』を所有していたとしても、それでも彼らにこの兩書に對する言及が無く、尹焞以外の直弟子たちがほとんど直接

觸れていないということは、むしろ二程がいかにかこの書に冷淡であったかを示していることである。二程がこの兩書を表彰する必要を全く感じていなかったのは確かであろう。

我々はとかく周敦頤の主著は『太極圖說』であって、『通書』はその補助資料のように見ながちであるが、當初はむしろ『通書』の方が目立っていた形跡がある。朱熹は「然れども諸本皆通書の後に附して、讀者遂に誤りて以て書の卒章と爲す」（『再定太極通書後序』、『晦庵先生朱公文集』七六、「周子太極通書後序」、同七五にも同内容がある）と、『通書』の後に『太極圖說』を置くテキストが流布していたことを言う。事實道學關係者でも、尹焞の「壁帖」聖學（『和靖尹先生文集』五）にしる胡宏の「周子通書序」（『五峯集』三）、祁寬「通書後跋」にしる目立つのは『通書』に對する言及である。それに對して朱熹の姿勢は徹底して『太極圖說』の解説として『通書』を見るのであって、それは『通書解』でも一貫している。朱熹は潘氏の手になる墓誌銘に「太極圖、易說、易通數十篇、詩十卷、今家に藏す」という順序で周敦頤の著作を擧げていることから、『太極圖說』が筆頭に置かれるべきことを確認している（『周子太極通書後序』、『再定太極通書後序』）。また張栻も「濂溪周先生の通書、友

人朱熹元晦太極圖を以て篇首に列し、……」と朱熹が『太極圖說』を頭に置いたことを強調している（『通書後跋』、『南軒文集』三三三）。それに對して『通書』と『太極圖說』の間に齟齬を感じ、どちらかに疑問を呈する場合、往々にして『通書』を軸にして『太極圖說』を議する立場がとられる。この論法は陸九韶、陸九淵兄弟も使用する（『與朱元晦』1）。もちろん朱震の「進周易表」のように陳搏に淵源する「太極」傳授の系譜に周敦頤を位置づけるものもあるが、同時代人にとって周敦頤のイメージは『通書』で形成されていた可能性を否定できないのである。いづれにしる朱熹の周敦頤表彰の根幹である『太極圖說』が、二程に深甚な影響をあたえた形跡は無いのである。

程頤の主著は言うまでもなく『易傳』である。そこに引かれていた同時代人は胡瑗と蜀の隱者（補作り）だけで周敦頤は全くでてこない。周敦頤の『通書』は『易通』という『易經』に關係する別名まで持ち、また「尤も善く名理を談じ、易學に深し」（潘氏撰の墓誌銘）と言われているのである。しかしこれは當然で、既に別稿で論じたように程頤の『易經』解釋はむしろ周敦頤のような立場を超越するという面を持っていた。

ここで二程の周敦頤に對する崇敬度を見てみよう。二程は周敦頤のことを「茂叔」と字でそっけなく呼ぶのであって、司馬光、張載、邵雍らには「先生」という敬稱を用いることがあるのと比べると不自然であると、朱氏や太田氏らは言う。このような従來の指摘の中で筆者が特に重要と見なすのは、二程が胡瑗に對してはおおむね敬稱で呼んでいることである。特に程頤は太學での師胡瑗には明らかに學恩を感じていたのであって、それに比べると周敦頤に對する態度は冷淡と言わざるをえない。二程は周敦頤を崇敬していたが道や學の前には皆平等ということでは呼んだ、ということではないのである。

朱、太田兩氏は更に周敦頤は初名は「惇(敦)實」であったが後に英宗の藩廷の諱を避けて「惇頤」にしたのに對し、程頤は「頤」のまま師の諱を避けなかったことを擧げる。ただ師の諱を避けるということがどれくらい一般的であったかが問題となろう。因みに朱彝尊は、程端蒙(正思)が自分の諱の字が周敦頤や程頤と同じ「頤」であるので父親に頼んで變えてもらったという話を引き(朱熹「程君正思墓表」、『晦庵先生朱文公文集』九〇)、程頤が程正思よりもこの姿勢でおくれをとるものではないはずと言う。

二程が周敦頤のことを「窮禪客」と呼ぶのは(『程氏遺書』六 79)明らかに師として見ていない證據と兩氏が言うのは、當然のことである。

二程の周敦頤に對する姿勢がどう見ても道を傳授された師に對するものではないという事は確かなのである。

よく問題にされることだが、そもそも程頤の「明道先生行狀」によると、程頤は一五、六歳の時に周敦頤に學んだあと、「未だ其の要を知らず、諸家に泛濫し老釋に出入すると幾ど十年、返て諸を六經に求めて、後に之を得たり」と、思想遍歴を経て、最終的には經書に求めることで道を得るのであって、周敦頤から傳授されたとはしていないのである。程頤がもし周敦頤から道の傳授を受けていたなら、その後「老釋に出入」しその後で「返て諸を六經に求めて、後に之を得たり」するはずがない。

太田氏らは、程頤が「明道先生墓表」(『程氏文集』一一)で「先生千四百年の後に生まれ、不傳の學を遺經に得、……」と言っていることを擧げる。つまり程頤に絶學繼承の功を歸するのであるが、これにはいくつでも付け加えられる。程頤は「嗚呼、予が兄弟道學を倡明せし自り、世方に驚き疑ふ」(『祭李端伯文』、『程氏文集』一一)と云うように、自分た

ちの思想は自分たちが初めて唱えたものと誇っている。また程顥自身も「明道嘗て曰ふ、吾が學受くる所有りと雖も、天理の二字は却て是れ自家體貼し出で来る」(『上蔡語錄』上13)と自負する。兩者とも自分たちの自得を鳴らすのであって、とても傳授を受けた者の言葉とは思われない。

以上は二程自身の言葉や態度をもとにした論述であった。そこで次に二程の周圍や門流の發言に移りたい。

三 程門の姿勢

まず周敦頤の友人だった潘興嗣の手になる墓誌銘には、二程の事が出てこない。また「門人朋友敘述竝序」は、題名通り程顥の門人や朋友が書いた彼に對する追悼顯彰文を集め程頤が序文を付しているものだが、いずれの文章にも周敦頤との授受が見えない。ただ劉立之のみ「汝南の周茂叔に従ひ問學し、性命の理を窮め、性に率ひ道を會し、道を體し徳を成し、孔孟に出處(入か)し、從容として勉めず」と言うが、續けて例として孔子が老子に禮を問うたこと等を擧げているのを見て、道の全面的な授受とは距離がある。以上は朱、太田兩氏が指摘するところである。因みに劉立之は字が宗禮。早く孤兒となったので二程の家で養われ、二程の叔父の

娘と結婚した初期からの弟子である(程頤「叔父朝奉墓誌銘」、『程氏文集』一二、『伊洛淵源錄』一四)。

なお程頤とは胡瑗の同門で、二程とも交際のあった呂希哲(呂公著の長子)は「二程初め濂溪に従ひて遊び、後青、藍より出す」(『宋元學案』一二)と言い、二程を出藍の譽れとする。またその孫の呂本中も「二程始め周茂叔先生に従ひ、窮理の學を爲め、後更に自ら光大、茂叔名は敦頤、太極説有り、世に傳はる」とするが(『呂氏童蒙訓』上)、これは後の話であるうえに「後更に自ら光大」と二程が歩を進めた點は認めている。清の全祖望は、この二呂の言葉を周程授受に對する疑念の根據として注目しているようである(『宋元學案』一一の序録)。なお陳亮あたりになるとこの呂本中の語を授受の證しとしている(『伊洛正源書序』、『龍川先生文集』二二)。

そもそも二程の直弟子たちのほとんどが直接自己の著作や語録で周敦頤顯彰を行っていない。せいぜい晩年の弟子である先引の尹焞「壁帖」聖學が目立つ程度であって、自戒のためというこの文獻の性格もあるが、引くのは『通書』のみである。あとは二程に私淑した胡安國の子の胡宏(一一〇六一一六二)に「周子通書序」があるのが目につくくらいであ

る。なお胡宏の方は周敦頤が「太極圖を穆脩より傳へらる」として、その淵源を陳搏まで遡らせるといふ「或る人」(朱震のこと)の言を引くが、「此れ殆ど學の一師なるか、其の至れる者に非ざるなり」とする。また彼自身は周敦頤を種放や穆脩と並べるべきではないとするが、その理由として「道學の士皆謂ふ、程頤氏は孟子の不傳の學を續げば、……」と言っているのを見ると、彼はともかく、當時の道學者の通念はむしろ程頤が不傳の繼承者であるというものであったことになる。

その胡宏も「今周子、程氏兄弟を啓くに不傳の學を以てす」(『周子通書序』)と周敦頤の功績を強調しつつ、一方で斯文を繼承する者として二程を讚える。「然らば之を誰に屬すか、と。曰く、程氏兄弟、明道先生、伊川先生なり、と」(『程氏雅言前序』、『五峯集』三)。また王安石に荒らされた經學の再建に果たした程頤の貢獻と奮闘を強調する。「其の時に方るや、西洛の程伯淳、其の弟正叔二先生なる者、天實に之を生じ、五百餘歳の數に當たり、眞元の會を稟け、孔孟の統を紹ぎ、六經の教を振ふ。然れども風氣仍て衰へて未だ盛んならざるなり。故に明道先生早世し、先進高弟相繼ぎ以て亡び、伊川先生一己の力を以て頽波を横制す」(『程子雅言

後序」、同上)。

實際には程頤が道學の實質的な確立者であった。ただその程頤は徹底して自己と程頤の思想的同一性を強調した。いわゆる北宋五子の自分以上の四者のうちで、程頤が一言の批判も口にしなかつたのは程頤のみである。また先引の諸資料のように程頤は程頤を絶學繼承者として讚える。そこで「周子通書序」にあつたように、後の道學者も兄である程頤を筆頭に置いたりするのである。ちなみに胡宏はその著『知言』漢文で一陰一陽の道を太極としたりしているが、『太極圖說』との直接的影響關係を云々できるような内容ではない。

ただ祁寬が「通書後跋」で、「先生(周敦頤)歿し、洛陽二程先生、學を時に唱ふ。異端を辨じ、邪説を闢き、孟子自ら而下、許し可とする所鮮し。獨り先生を以て道を知ると爲す」と言うのが問題になるかもしれない。しかし續けて彼が證據に擧げている資料は『程氏遺書』所採の程頤の語、程頤「明道先生行狀」といつた我々が目にできしかも授受の典據としないかあるいはむしろ反證となりうる範圍を出ないのであつて、そのうえで「其の推尊此の如し」とされても迫力が無い。ただ彼は先述のように程頤最晩年の弟子尹焞の警咳に接した人物なのであつて、あるいは尹焞から周敦頤顯彰の

影響を受け、それを擴大して傳授のような表現にまでもっていったということであろうか。

また全祖望「周程學統論」(『鮚埼亭集外編』三八)では、公式の史書である『哲宗實錄』、『徽宗實錄』に二程の從學が記されていることなどから(これはおそらく朱熹「伊川先生年譜」、『晦庵先生朱文公文集』九八の原注あたりによっている)、周程の師弟關係を認めようとしている。しかしそれでも道の傳授があったとまでは言っていない。因みに『徽宗實錄』については撰者の呂祖謙が修定の狀況を朱熹に書き送り(『與朱元晦』5、同三)、その中の程氏の傳を朱熹が「甚だ備はれり」と稱賛しているのであって(『朱子語類』九三80)、むしろ朱熹の影響を受けている可能性がある。なお全氏の議論は、二程の周敦頤に對する記述の冷淡さを、二程の門人たちが二程を表彰したいがためにとつた表現とするなど、推測にのみよるものが多い。

このように見てくると、周程授受が成立しないことはほぼ確實と思われる。しかし繰り返し返すが、二程が周敦頤に從學したのは事實であり、影響もそれなりに受けている。そこで次に二程が周敦頤から得たものを検討したい。

周程授受再考(土田)

四、連續と斷絶

二程が周敦頤から學んだものを、彼ら自身の言葉からさぐると次の二點が挙げられる。

まず「先生の學を爲すや、十五、六の時、汝南の周茂叔(敦頤)の道を論ずるを聞きし自り、遂に科學の業を厭い、慨然として道を求むるの志有り」(程頤「明道先生行狀」とあるように、科學という現世的な目的ではなく純粹に内面の純化を圖る學問の重要性の認識である。そして次に「昔、學を周茂叔に受くるに、毎に顔子・仲尼の樂しむ處を尋ねしむ。樂しむ所は何事ぞ、と」(『程氏遺書』二上 23)と明言されているように、顔回好學への注目である。これらは程頤についての記事であるが、同時に從學した程頤も同じ感化を受けたのは明らかである。なお周敦頤がいかに顔子好學に意を用いていたかは、潘興嗣の「贈茂叔太博」でも「毎に顔子の能く聖を瞻みふを懷いだふ」と詠じられている。

この二點は密接に關係している。まず二程が周敦頤によって目を開いた學問とは聖人に到達するのを求める學であつて、そのことは張載も「二程十四五歳の時従り、便ち銳然として聖人を學ばんと欲す」(『經學理窟』學大源上)と言つて

いる。そして孔子に代表される聖人と一般人の中間に位置する賢人としての顔回の表彰こそ、二程が周敦頤から得た最大の¹⁰⁾ものであった。つまり二程は聖人を目指す學の自覺、その際の手がかりとして顔回の好學の持つ重要性の認識を、周敦頤から吸収したのである。

周敦頤は『通書』志學章第十で「聖は天を希ひ、賢は聖を希ひ、士は賢を希ふ。伊尹顔淵は大賢なり。……伊尹の志す所を志し、顔子の學ぶ所を學ぶ」と言い、更に聖學第二十で「聖は學ぶ可きか、と。曰く、可なり、と」と述べる。これがかの有名な程頤の「顔子所好何學論」(『程氏文集』八)と同じ方向の議論であるのは確かである。程頤は二四歳ごろ都の太學に入る。その時、國子監直講であった胡瑗は太學でも教授していたが、「顔子が好んだのはいかなる學か」という問題を學生に示した。程頤はそれに對しこの「顔子所好何學論」を提出し、それを見た胡瑗は驚嘆して彼を學職に引き立てた。この「顔子所好何學論」は、人間の聖人に至る可能性を言い、その可能性を示す目覺ましい存在として顔回を擧げる點で、周敦頤の議論と同じである。程頤は少年時代に周敦頤から得た顔回論を更に體系化して提出したのである。それと同時に胡瑗も同じような顔回表彰の姿勢を持っていたので

あって、それゆゑ胡瑗は程頤の答案を評價し、その議論の體系性に驚いたのである。¹¹⁾

そもそも二程が周敦頤に従學したのは、彼らの父の程珦が周氏を知ったのが縁である。周敦頤は當時若輩で知事にも知られていなかった。程珦は彼の氣貌が常人とは異なるを見て語りあってみると、果たして道を知るのを學ぶ人閒であったので友とした(以上、程頤「先公太家傳」、『程氏文集』一二)。程珦はいつも靜坐していたように(同上)、このような風氣の人物たちが當時各地にいて、互いに引き合っていたと見られる。同じような存在としては、周敦頤が交遊を持った許渤も擧げられる(九七八—一〇四七、『遺書』三 拾遺2)。彼は衣服も換えなかつた人物で(同 1)、程頤はその「持敬」の姿勢を讀んでいる(『遺書三』84)。二程から見れば周敦頤は父親の友人の一人で、父親と同じ風氣を持ちながらいつその思想性を持つ存在だったと思われる。あるいは二程にとつての周敦頤は、ともすれば父程珦の世代の中に溶けこんでいく存在だったかもしれない。いづれにしろ程頤が周敦頤から學んだものを體系的に構成して胡瑗の評価を得たというのは、在野の思想が中央での表現を獲得しはじめた象徴的な事例であるが、それが結實するには程頤の理の思想の熟成

を待たなければならなかった。

さて周敦頤が目指さず境地の具體的内容としては、「周茂叔窓前の草を除去せず。之を問へば、自家の意思と一般なりと云へり」(『程氏遺書』三)⁽²¹⁾の程頤の語)とあるように、内心と外界の一體が擧げられる。ただ周敦頤はこのような萬物一體を「無欲」(『通書』聖學第二十)や「無爲」(同 誠幾德第三)という心境へ收束させていくのであって、それがいかに萬物の個々の秩序と兩立するかの明確な理論の提示に成功しているとは見えない。⁽²²⁾彼は儒教の立場を個々の議論に滲ませようとするのだが、これのみでは結局無や空の境地に引きつけられていってしまう。それゆえ先にも擧げた周敦頤に對する「窮禪客」というようなきめつけかたが時として二程の口から出ることになるのである。⁽²³⁾ここに二程の思想が登場する意味があった。

別稿「宋代思想史における周敦頤の位置」などでも述べたが、周程の關係は邵雍と李之才の關係と同様である。つまり學を受けたことがあるが「乃ち其の自得する所の者多し」(程頤「邵堯夫先生墓誌銘」、『程氏文集』四)というものであった。そこで今度は周敦頤の思想的立場及び二程との異同の検討が要求されることとなるが、それは別稿の論題であ

る。「周程授受」の「再考」を試みた本稿はここで擱筆する。

注

(1) 前掲の拙稿「道統論再考」など。

(2) 拙稿「楊時の立場」(『日本中國學會報』三三、一九八一)の注(9)など。

(3) 我が國の明治以後ものでは、宇野哲人『二程子の哲學』(大同館書店、一九二〇)は議論の要點を簡明に整理し周程授受を否定している。また荻原擴『周濂溪の哲學』(藤井書店、一九三五)は授受肯定・否定の兩方の論據を整理している。大島晃「宋學における道統論について」(『中哲文學會報』六、一九八一)はこの問題の特に朱熹關係の資料を丁寧に涉獵している。近年の中國のものを見ると、例えば徐遠和『洛學源流』(齊魯書社、一九八七)などでは從來からの資料によって二程には周敦頤から學んだ面と自分で發展させた面があるとし、唯物論・唯心論の圖式による説明を試みている。

ところで周程授受とはもともと全面的な傳授を指したのではなく、二程が周敦頤から道を得て更にそれを深化發展させたことを言ったまでだという見方もあるかもしれない。しかし周程授受とは周敦頤を道學の祖とするという前提のもとで成立するものなのであって、この點の検討を抜かしては意味を持ちえない。從來のこの方面の議論は周敦頤を道學

系列に置くことに無反省であるうえに、周程兩者の思想の個々の特質と相互の差異の把握において曖昧あるいは類型的に過ぎていたとの感を拭えない。

- (4) A.C.Graham, *Tao Chinese Philosophers Ch'eng Ming-tao and Ch'eng Yi-chuan*, London, 1958, pp.143-145) 及び「程伊川における理一の性格」『フィロソフィア』六四、一九七六)の注(23)。なおこの「易序」に對する疑いは、戸田豐三郎「坊刻周易本義の考察と原本本義の成立年代」(『易經注釋史綱』、一九六四)などにも見える。
- (5) 友枝龍太郎「不干齋ハビアンと朱子學」(『小尾博士退休記念中國文學論集』、一九七六)。
- (6) 周敦頤の著作が周氏の家に藏されていたということは、潘氏の書いた墓誌銘にも見える。
- (7) 程頤の『易經』解釋がむしろ胡瑗の影響を受けていること、また彼がいかに無の思想の超克を試みたかについては、拙稿「伊川易傳の思想」(『宋代の社會と文化』、汲古書院、一九八三)。また胡瑗の『易經』解釋、及び程頤と胡瑗の思想の差については、拙稿「胡瑗の學問―その性格と位置」(『東洋の思想と宗教』一、一九八四)。
- (8) 絕學繼承を周敦頤に歸したり二程を持ち出したり不統一という現象は朱熹にも見られる。注(3)所引の荻原氏の著書及び大島論文にこの方面の朱熹の資料の一覽がある。もともと道學は程頤の學派、あるいはその程頤が絕學繼承者として讀えた程頤を加えて二程の學派という性格が強かった。あるいは年代的な學說の變化もあるかもしれないが、基本的には尹焞にしろ朱熹にしろ、それを繼承する面と特に周敦頤を顯彰する面とが、資料のばらつきという形で現れていると考えられる。
- (9) もと「全」に作るが、理學叢書版『胡宏集』(中華書局、一九八七)の校語によって改めた。
- (10) 當時の顔回表彰の廣がりそれが持つ意義については拙稿「陳襄の思想とその周邊―道學形成史の一視角として」(『東方學』七五、一九八八)。
- (11) 拙稿「程頤―道學の確立者」(『中國思想史』下、ベリカン社、一九八七)で、筆者の見方を整理しておいた。また胡瑗が程頤を受け入れる受皿を持っていたことについては、注(7)所引の拙稿「胡瑗の學問―その性格と位置」。
- (12) 黃庭堅「濂溪詩」(『豫章黃先生文集』一)の「胸中灑落、光風霽月の如し」も周敦頤のかかる風氣を形容するものとしてよく知られている。この語は李侗が稱え(『延平答問』)、また張栻と朱熹との間でこれをめぐるやりとりもあった(『答張敬夫』3、『晦庵先生朱文公文集』三二、など)。
- (13) 道學形成に關わった思想家たちが萬物一體觀を共有していたことについては、注(4)所引の拙稿「程伊川における理一の性格」。また彼らがいかに萬物一體と倫理的價值規範を兩立させたかについては、程頤を論じたものは拙稿「程頤の

思想の基本構造」(『中村璋八博士古稀記念東洋學論集』、汲古書院、一九九六)、程頤を論じたものは「程伊川における理一の性格」。

(14) 程頤が周敦頤に對して見せた比較的高い評價は、天地萬物の理から六合の外にまで説き及んだ邵雍の論に感服した程頤が「平生惟だ周敦頤の論じて此に至るを見るのみ」と言ったという記事に見える(邵伯溫『易學辨惑』)。こゝだけ見ればこの周敦頤の論が『太極圖說』の内容かと推測されることがあつたのも當然である。ただそれでも二程がなぜ『太極圖說』に全く言及しないのかという當初の疑問に勝てるものでは到底ない。それに二程は邵雍の數をもとにした宇宙論に對しては、例えば「空中樓閣」(『程氏遺書』七 20)という語に象徴されるように一貫して批判的だったのであつて、この語の信憑性に對しては些か疑念も残る。邵伯溫は邵雍の子であるから邵雍自身から聞いた話かもしれないが、反面呂祖謙が言うように邵雍顯彰のために程頤らが持ち出された可能性もある(『與朱侍講』2、『東萊呂太史全集』二七)。なお朱熹は程頤が評價した内容として『漁樵問對(對問)』の文をあげている(『答呂伯恭』4、『晦庵先生朱文公文集』三三三)、この書は邵雍のものとされる一方で、『郡齋讀書志』に張載の撰とあつたり、程門の劉安節の文集『劉左史集』に收められていたり、資料としては不安定である。

〔本稿は一九九四年度早稲田大學特定課題「唐宋期における道學形成史の基礎的研究」の成果の一部である。〕